



近代文芸 資料複刻叢書第四集

圓朝全集

月報 5



— 鶴殺刃庖丁 挿画 —

世界文庫

近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十八年十月十日発行

全十四卷
定本 圓朝全集
〈巻の五〉

限定版 五五〇部 定価千弍百円下二三

	版	定	限	
第				

校訂編纂者
圓朝會代表者

鈴木行三

発行者 松本富夫

発行所

株式
会社

世界文庫

東京都目黒区原町一、三三五番地

電話 東京七二三局九二四四(代表)
振替 東京七八四九八番

序^{じょ}

居士は東京^{とうけい}に生れ東京^{とうけい}に長ちたる者なり。僅に人事を解せしより、市川團十郎氏の演劇^{しはる}と三遊亭圓朝氏の談藝^{はなし}を好み、常に之を見、之を聞くを以て無上の樂しみと爲せるが、明治九年以來當地に移住せるを以て、復兩氏の技藝を見聞する能はず。只新聞雜誌の評言と、在京知人の通信と、當地の朋友が東京歸りの土産話とに依て、二氏の技藝の、歲月と共に進歩して、團十郎氏が近古歴史中の英雄豪傑に扮して、其精神風采を摸するに奇を専らにし、圓朝氏が洋の東西、事の古今、人の貴賤を論ぜず、其世態人情を寫すに妙を得たるを知り、彌仰慕の念に耐ず、一回^{ひとたび}之を見聞せんと欲するや極めて切なり。去る十七年の夏、偶事に因て出京せるを幸ひ、平素の欲望^{のぞみ}を達せん事を思ひ、旅寓に投じて、行李を卸すや否や、先づ主人を呼で二氏の近狀を問ふ。主人答て曰く、團十郎は新富劇^{しんとみず}に出場せるが、該劇^{かのさ}は近日炎帝特に威を恣にするを以て、昨日俄に場を閉ぢ、圓朝は避暑をかねて、目今静岡地方に遊べりと。居士之を聞て憮然たるもの暫久^{やひさ}しうす。此行都下に滯留すること僅に二周間に過ず、團十郎再度^{ふたたび}場に登らず、圓朝氏留つて歸らざるを以て、遂に二氏の技藝を見聞する能はず、寶山空手の思ひ徒に遺憾を齎らして還る。其翌十八年の夏酷暑と惡病

を避けて有馬の温泉に浴す。端なく會人無々君と邂逅して宿を俱にす。君は眞宗の僧侶にして、學識兩ら秀で尤も説教に長ぜりと。君一日浴後居士の室に至る、茶を煮て共に世事を談ず。君廣長舌を掉ひ無碍辯を恣にして頻に居士の耳を駭かす。談偶文章と演説の利益に及ぶ。君破顔微笑して曰く、文章の利は百世の後に傳はり、千里の外に及ぶ、演説の益は一席の内に止まり數人の間に限れり、故に利益の廣狹より言へば、素より同日の論に非ず、然れども其人の感情を動かすの深淺より言へば文章遠く演説に及ばず、且近來速記術世に行はれ演説をそのまゝ筆に上して世に傳ふの便を得たり、親しく耳に聞くと、隔りて目に視ると、感情稍薄きに似たれども尙其人に對し其聲を聴くの趣を存して尋常文章の人を動すに優れり、余は元來言文一致を唱ふる者なり、曾て新井貝原兩先輩が易讀の文を綴りて有益の書を著はすを見て常に其識見の高きを感じれども、然れども尙其筆を下すや文に近く語に遠きを恨みとなす、維新以降文章頗る體裁を改め、新聞雜誌の世に行はるゝや、文明の魁首社會の先進たる福澤福地兩先生高見卓識常に文を草する言文一致の法を用ひ、高尚の議論を著はし緻密の思想を述ぶるに、佶屈聲牙の漢文に倣はず、艶麗嫺雅の和語を摸さず、務めて平易の文字と通常の言語を用ひ始めしより、世の後進輩靡然とし

て其風に習ひ、大いに言語と文章の徑庭を縮めたるは余の尤も感賞する所なり、いな大いに世の文明を進め人の智識を加ふるに裨益あり、且夫試に言語と文章の人の感情を動かすの輕重に就て爰に一例を擧げんに、韓退之蘇子瞻の上に駕する漢文の名人、紫式部兼好法師も三舍を避る和語の上手をして文を草せしめ、之を贈りて人の非を諫めしむると、訥辯鈍舌の田夫野老をして面前言を呈して人の非を諫めしむると、其人の感情を動かす孰れか深き、韓蘇紫兼の筆恐くは田夫野老の舌に及ばざらん、又他の一例を引んに、後醍醐天皇新田義貞に勾當の内侍を賜はる、義貞歡喜の餘り「されば死ねとの仰せかや」の一語を發せる旨太平記に記せるを、或る漢文の名家、其語を漢譯して曰く「吾をして死なしむるなり」と原譯兩文の人の感情を動かす孰か深きと言ふに、原文の妙、譯文に優ること數等なるを覺ゆ、蓋原文は言語に近く譯文は言語に遠ければなり、又本多作左が旅中家に送りし文に曰く「一筆申す火の用心、阿仙泣すな、馬肥せ」と火を警むるは家を護る第一緊要的の事、阿仙は一子の名泣すなの一語之が養育に心を用ひん事を望むの意至れり、馬肥せの一句造次顛沛にも武を忘れざる勇士の志操十分に見ゆ、又遊女高尾が某君に送りし後朝の文に曰く「ゆふしは浪の上の御歸り御館の首尾如何此方にては忘れねばこそ思ひ出さず候かし

く、君は今駒形あたり時鳥」と此兩尺牘文章字句の上より論ずれば敢て鍛練の妙を盡せしに非ず、推敲の巧みを求めたるに非ねども、僅々の文字に能く情理の二ツを盡し、之を退之が孟尙書に與ふるの書、兼好が人に代つて鹽谷の妻に送るの文に比するも、人の感情を動かすの深き決して渠に劣らざる可し、是も亦他に非ず其文の直に言を寫せばなり、抑も人の喜怒哀樂直に發して言と成り再び傳つて文と成る、言を換て之を言へば、言は意を寫し文は言を寫せるものなり、直寫と復寫と其精神を露はすに厚薄あり、隨て他の感情を動かすに輕重ある又宜ならずや、方今漢文を能するを以て世に尊まるゝ者極めて多く、中に就て菊池三溪翁依田百川君の二氏尤も記事文に巧みに、三溪翁は日本處初新誌の著あり、百川君は譚海の作あり、俱に奇事異聞を記述せるものにて文章の巧妙なる雕蟲吐鳳爲に洛陽の紙價を貴からしめしも、余を以て之を評さしめば、未落語家三遊亭圓朝氏が人情話の巧に世態を穿ち妙に人情を盡せるに如ず、其人の感情を動す頗る優劣ありと言んとす、嗚呼圓朝氏をして歐米文明の國に生れしめば、其意匠の優れたる、其辯舌の秀でたる、大いに公衆の尊敬を蒙り、當に非常の名譽と非常の金銀を得るに止らず、或は爵位をも博し得て富貴兩ら人に超え、社會上流の紳士に數へらるゝや必せり、惜哉東洋半開の邦に生

れたるを以て僅に落語家の領袖と呼べ、或は宴會に招かれ或は寄席に出で、一席の談話漸く數十金を得るに過ず、其位置たる尋常一様の藝人と伍して官吏學者の輩に向て一等を譲らざるを得ず、實に不幸と謂つ可し、と口を極めて之を賞賛す。居士も亦其説の當れるを賛して可と稱す。爾來居士の圓朝氏の技に感ずるや又一層の厚さを添へ、同氏の談話筆記怪談牡丹燈籠、鹽原多助一代記等一編出る毎に之を購ひ、目讀の興を以て耳聞の樂に換ゆ、然り而して親しく談話を聞くと坐ら筆記を讀むと、自ら寫真を見ると實物に對するの違ひ有れば稍隔靴搔痒の憾無きにあらず、且や圓朝氏固より小説家ならねば談話の結構に於ては或は間然するところ有るも、話中出るところ夥多の人物老若男女貴賤賢愚一々身に應じ分に適へ、態を盡し情を穿ち、喜怒哀樂の狀目前其人を見るの興味有らしむるに至りては實に奇絶妙絶舌に神ありと言ふ可し。益々無々君の言文一致の説に感じ、文章の言語に如かざるを辨へ、且曩に無々君が圓朝氏の技を賛する過言に非るを知る。頃來書肆巖々堂主人一小冊を携へて來り、居士に一言を冠せん事を望む、受て之を閱すれば、即ち三遊亭圓朝氏の演ぜし人情談話、美人の生理を筆記せるものなり。其談話は、福地源一郎君が口譯して同氏に授けたる佛國有名の小説を、同氏が例の高尙なる意匠を以て吾國の近事に





翻案し、例の卓絶なる辯舌を以て一場の談話として演述したるものにて、結構の奇、事狀の異、談話の妙、所謂三拍子揃ひ、柳の條に櫻の花を開かせ、梅の香りを有たせ、毫も間然する所なきものにて、曩に世に行はれし牡丹燈籠、多助一代記等に勝る事萬々なり。居士一讀覺えず案を拍て奇と叫び、愈々無々君の説に服し、圓朝氏の技に駭き、直に筆を採て平生の所感を記し、以て序に換ゆ。

明治二十年四月二十日

半痴居士 宇田川文海識

圓朝全集 卷の五 目次

口 繪

三遊亭圓朝肖像
圓朝筆短冊
武藏野の額(圓朝、默阿彌、永機、龍齋合作)

松の操美人の生埋……………

(序) 宇田川文海
(口繪) 歌川國保
挿畫 大蘇芳年…………… 一

綠林門 松竹……………

(挿畫) 大蘇芳年
(同) 水野年方…………… 一七
(忍ヶ岡義賊の隱家)

鶴殺嫉奴庖刀……………(挿畫) 大蘇芳年…………… 四〇九

松の操美人の生埋

一

一席申し上げます。お耳慣れました西洋人情話の外題を、松の操美人の生埋とあらためまして：これは池の端の福地先生が口うつしに教へて下さつたお話で、佛蘭西の俠客が節婦を助けるといふ趣向、原書は *Buried a life* といふ書名ださうで、酔つた時はちと云ひ悪い外題でございますが、生きながら女を土中に埋め、生埋めに致しましたを土中から掘出しする佛蘭西の話を、日本に翻譯して、地名も人名も、日本の事に致しましただけで、前以てお断りを申さんでは解りませんから、申し上げますが、アレキサンドルを石井山三郎といふ俠客にして、此の石井山三郎は、相州浦賀郡東浦賀の新井町に廻船問屋で名主役を勤めた人で、事實有りました人で、明和の頃名高い人で、此の人の身の上に能く似て居りますから、此の人に擬へ、又カウランといふ美人をお蘭と名づけ、ザリウといふ賊がございますが、是は粥河圖書といふ寶曆八年に改易に成りました金森兵部少輔様の重役で

千二百石を取つた立派な方だが、身持が悪くて、悪事を働きました事を聞きましたから、これを圖書の身の上にいたし、又マクスにチャールといふ、彼方に悪人がござりますからマクスを眞葛周玄といふ醫者にして、チャールを千島禮三といふ金森家の御納戸役にいたし、巴里の都が江戸の世界、カライの港が相州浦賀で、倫敦が上總の天神山、鐵道は朝船夕船に成つてをりますだけで、お話はすべて原書の儘にしてお聞きに入れますから、宜しく其方でお聞分けを願ひます。金森家の瓦解に成りましてから、多く家來も有りましたが皆散りくばらゝになりまして、嫡子出雲守、末の子まで、南部大膳大夫様へお預けに成りました。粥河圖書は年齢二十六七で、色の白い人品の好い仁で、尤も大祿を取つた方は自然品格が違ひます。大分貯へも有りまして、白金臺町へ地面を有ちまして、庭なども結構にして、有福に暮して居りました。眞葛周玄と云ふ醫者を連れて、丁度十月十二日池上のお籠りで、唯今以て盛りますが、昔から實に大した講中がありまして、法華宗は講中の氣が揃ひまして、首に珠數をかけ團扇太鼓を持つて出なければなりません様に成つて居ります。粥河は素より遊山半分信心は附たりですから、眞葛の外に長治といふ下男を連れて、それに芳町の奴の小兼といふ藝者、この奴といふのは男らしいといふ綽名で、この小兼は

厭味の無い誠にさつぱりとした女で、藝が善くつて器量も好うございます。それに客愛想も
好いから當時の流行妓で家には少しの貯へも有るといふ位、もう一人はその頃の狂歌師談
洲樓焉馬の弟子で馬作といふ男、併し狂歌は猿丸太夫のお尻といふ赤ツ下手だが一中節を
少し呻るので、それで客の幫間を持つて世を渡るといふ男、唯此の男の顔を見ると何とな
く面白くなるといふ可愛らしい男で、皆様が最員にして供に連れて歩くといふ、此の五人
連で好天氣でぶら／＼と出掛けました。馬私し初めて來たので、尤もお宗旨で無いからだ
が何うも素敵で。ときよろ／＼する。兩側は一面に枝柿を賣る家が並んで、其並びには飴
菓子屋汁粉屋飯屋などが居て、常には左のみ賑かではございませんが、一年の活計を二日
で取るといふ位な苛い商ひだが、實に盛んな事で、お参りの衆は皆首に珠數を掛けて太鼓
を叩きます。馬斯う何だか珠數と太鼓が無いと極りが悪いやうで、もし珠數と太鼓を買
はうぢやアありませんか、珠數といふのを。圖馬鹿ア云へ、此連中にそんな物が入るもん
か、入らんぜ。馬それでも何だか無いと形が極りませんから、兼ちやんお待ちよ珠數を買
ふから。おい婆さん。婆はい／＼。馬あの珠數は幾らだ。婆はい／＼其方はなんで三分二
朱でございます。馬高いね、もう些つと安直なのは無いかね、安いので宜しい、今日一日

の掛流しだから、安いのが好い、安いのは無いかい、其方の方は幾らだ。婆「此方のは白檀ですから一兩二分で。馬「ひやア篋棒に高い、もつと安いのは無いか、此方のは。婆「これは紫檀ですから二分で宜うございます。馬「まだ高い、おいほんの間に合せにするのだから。婆「そんなら梅と櫻に遊ばせ。馬「それは安い。婆「六百文でございます。馬「妙々梅と櫻で六百出しや氣儘か、宜しい、皆様先へ入らつしやい、ぢやア婆さん此金で。婆「生憎お釣がございません、お氣の毒様で、何うかお端錢がでございますなら。馬「ぢやア斯うしよう、お参りをして来るからそれ迄に取替へて置いてお呉れ。婆「はい畏まりました。と婆は金を受取り珠數を渡します。馬作は珠數を首に掛け、馬「そんなら婆さん屹度頼んだぜ、さア此奴が有りやア大威張だ、時に兼ちゃん何うです大變な賑ひですなあ、今日のお賽錢は何のくらゐ上りませう、羨しいね私もお祖師様に成りてえ、もしあんな別嬪なぞに拜まれてね。婆「馬鹿アお云ひな勿體ない。馬「さア來た。と本堂に上り柏手をポン。馬「いや柏手ぢやア無かつた粗忽かしくつて宜い、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經もし一寸様子が好いぢやアありませんか別嬪ばかりずうつとさ、色氣の有る物にやア佛様でも敵ひませんね、女がお参りに來なくつちやアいけません、何うも鼻筋の通つた口

